

日光研修を終えて

国際日本学部 国際文化交流学科 観光文化コース島川ゼミ公務員組
平松にち佳（リーダー）、神田恵維、辰口凜奈、吉川航平、橘燎央

私たちは、島川ゼミの中で公務員を目指している5名がチームを形成しています。そのチームで9月中旬に日光市を訪れ、「地域を観光によって活性化させる」という視点をもとに日光市の観光まちづくりの先進事例を学びました。

はじめに、日光市役所の田宮さんに日光市の観光の実情や課題についてお話を伺いました。お話



日光市役所で観光まちづくりのレクチャーを受ける

の中で印象的であったのは「日光に住んでいる住民と観光地の観光従事者の間で考え方に相違が生まれてしまう」ということでした。昔は、市民の従事者の間に八百屋や肉屋、小さな商店など、直接観光業には携わらないが、観光客が日光を訪れることによって、恩恵を受ける市民が多かったようです。しかし、現在は、そのような市民と従事者の中間に立つ人々が減少し、両者の間で二極化が生まれてしまっている状況であるため、市民の中でも、観光に対する考え方が一致しないことがあるそうです。このことから、その地に暮らす人々の考えや思いと、行政側がやりたいことをすり合わせることの難しさを学ぶことができました。

次に、私たちはNPO日光門前まちづくりの岡井さんの案内のもと西町を視察しました。そのエリアでは、「グリーンスローモビリティ」に乗り、憾滿ヶ淵に行き、「化け地蔵」を見て回り、日光田母沢御用邸記念公園や日光真光教会、神橋、金谷ホテルなど数多くの場所を案内していただきました。多くの建造物の中で特に印象的だったのは、「金谷ホテル」です。初めて訪れる者や小学校の修学旅行以来の私たちにとって、それを見た時の



これが憧れの金谷ホテル！歴史の重みを感じます

印象は「すごい」「風情あるホテルだ」といった一般的な感想でした。しかし、実はここは最初から有名な大規模ホテルだったわけではなく、当時は、今というゲストハウスのような自宅に外国人の方を招待し、宿泊させたのが原点であったそうです。そのことを知らない私たちは「ホテル業界の中でも成功したホテル」としか認識していません

んでした。国際系の学部に所属している身として、日本古風の町と感じていた日光市が、実際は海外的な要素を含む歴史を持ち、それらが上手く共生している都市であることに驚きを感じたのと同じように、現地に行ってみないとわからないという観光の面白さを実感することができました。



日光東照宮は想像以上に荘厳、絢爛でした。

研修2日目も、幸いなことにNPOの岡井さんに日光を案内していただきました。その日は、輪王寺を通り、日光の代名詞とも言える「日光東照宮」に足を運びました。そこで私たちは、新たな学びを得ました。それは、日光の世界遺産として登録されているのは寺社単体ではなく、「日光の社寺」であるということです。日光の観光において寺社のみに足を運ぶ観光客も多いと思います。しかしながら、周囲の自然や文化も一帯として世界遺産であるので、是非、日光を訪れる観光客の方々にも周囲の風景や歴史を含め、東照宮の良さを感じてもらいたいと強く感じました。

日光東照宮を後にし、私たちは日光名産である

羊羹や三猿の人形焼きを食べながら東町を町歩きしました。その最中に、岡井さんから歴史や由来の説明を聞きながら行うことで、その場所を感じるだけでなく、体験したような気持ちになりました。特に、古地図に描かれたものが現在も残っている様子を見ることができたときは日光の歴史の一部を強く実感することができました。

この内容の濃い研修期間を通し、また実際に日光市を訪れてみて、日光市の本来の素晴らしさを感じ、より良さを体感することができました。同時に古くから多くの人々を迎え入れてきた門前町が今後どのように変化していくのか、また、どのように現在の風景を保存していくのか、そして、日本の代表的な観光地である日光市が地元住民の方々とのようにして調和をとって観光推進をしていくのかにとっても興味関心を持ちました。さらに、日光市のような外国との関連性の高い都市は、今後「インバウンド観光」に大きな影響を与え続けると思います。この「日光東照宮」だけが日光という認識ではなく、海外との関連性を持つという意外な要素が含まれ、あまり知られていない「第2の日光市」を今後も継承していくよう祈ると同時に、観光を学ぶ身として、また公務員を志願する身として、それらが調和した観光政策を考えてみたいと感じました。今回の研修で学んだことをもとに、今後のゼミ活動や卒業論文の作成、就職活動などの学業により一層励んでいきたいと思えます。



日光の知る人ぞ知る穴場観光スポット憾満ヶ淵・化け地蔵で仲良く記念写真